

Title	メソポタミヤの文化時期
Sub Title	
Author	間崎, 万里(Masaki, Masato)
Publisher	三田史学会
Publication year	1936
Jtitle	史学 Vol.15, No.2 (1936. 7) ,p.186(354)- 186(354)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	餘白録
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19360700-0186

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

メソポタミヤの文化時期

一九三〇年の冬、考古學調査隊の指導者達がバグダードに會合して協議した結果、メソポタミヤに於ける古代史はその文化の特色によつて限定された諸時期に分ち得ること、又數字を以て表明した年代に缺如してゐるので、是等の時期の系列は是迄發見せられ或は發見さるべきものに對して連絡と意味を賦與するが如き歴史的輪廓を供給することを決定したが、その後も使用せられてゐるので、之を記して置かう。(C. L. Woolley, *The Development of Sumerian Art*, 1935. Pp. 29—31.)

一、al 'Ubaid. アル・ウバイド期は容易に認知し得る彩色土器型の使用を以て特色とする。アル・ウバイドはウルの近くにあつて、一九一八年H・R・ホール博士が多量にこの土器を發見した處である。

二、Uruk. ウルク期は、ウルカに於けるドイツ人の發掘の際、アル・ウバイド型土器包含層の上層から出土したところの無紋土器型を以て特色とする。スメル人によつてウルクと呼ばれたこの古代都市は、舊約聖書ではエレク(Erech)と記されてゐるが、近代アラビヤ語ではワルカ(Warka)と言つてゐる。この同一市址に對する三種の稱呼は、それごと今日限定的慣用語となつてゐる。即ちこの發掘地を示すにはワルカを以てし、この種土器及びこの型式土器によつて定まる時期はウルクと稱し、この古代都市とこの地を首府としてゐた王朝を指す場合には之をエレクと言ふのである。

三、Tandat Masr. これはキシユ附近の小地域の名稱であつて、ラングトン博士が頗る原始的な繪文字を銘刻した土版と關聯される顯著な多色土器を發見した處である。この種土器は後ちウルに於てもワルカに於てもウルク土器包含層の上層に於て發見されたのである。

四、食パン煉瓦期(The Plano-convex Brick Period)。この名は最初スメル人がその建築に側面及び底面が平坦であつて、上部が食パンの上部の様に丸味を帯びた特有の煉瓦を使用した時期に與へられた名であつた。この時期は、今日初期王朝期と稱せられてゐるもので、非常に長い時期に亘り、ウルの王陵の時代、前三〇〇〇年の直前に比定せられるウル第一王朝期、ラガシュの初期の君主達と殆んどアッカドのサルゴンの治世に至るまでスメル王名表に記されてゐる諸王朝を含んでゐる。

五、サルゴン時代。之はサルゴンといふ雄大なる人物(最少限計數をとる年代によれば、前二五二八年)が時代の象徴とされる時代であつて、數度の内亂及び一時的王朝興廢の一時期の後、鞏固なる王國の復興を見、且つセム語を話すアッカド人が國家内の主要分子として出現した時代である。

六、ラガシュの後代の君主達(ゲデア Gudea とその子孫)は直接ウルの第三王朝につき、この雄大なる時期の後、スメルの人民と文明はセム人のバビロンのそれに没却するのである。(間崎万里)